

電子図書館への道

附属図書館長 久 保 靖

研究室の学生がカチリ、カチリとマッキントッシュを使っている。仕事をしているのかゲームをしているのか遠目にはわからない。これが遊び感覚で仕事をとということなのか、平和な光景である。このマックとかウインドウズとかいうテレビゲームまがいのものは、つい先頃までは私にとって近づきたくないものであった。

10年前ごろまでの学生は、卒業式の祝賀会の席上などで必ずと言って良いほど次のような苦言を聞かされたものである。「今の若い者は字を知らない。誤字・当字が目余る。大学を卒業しても手紙一本書けない」と。ところが最近はこのような言葉をほとんど聞かなくなった。理由は簡単、ワープロというものが出現し、急速に普及したからである。どんな難しい字も間違えずに書けるばかりでなく、手紙文もちゃんと組み立てることができる。国語力のない者の増加という量的変化が、国語力そのものの質の変化をもたらしたのである。「量的変化が質的变化に転化される」という弁証法的発展の結果と言えようか。手書きの書類がほとんどなくなった今日、達筆であるとか草書が読めるとかということが、何の取り得でもなくなってしまった。教養の質もまた変化したのである。頭の固まった中高年旧世代はこの変化について行けず、キーボードを見るとジンマシンが出ると言う者もいるという。事実、私の同年輩には、自動車を運転できないと同様にワープロを使えないものが少なくない。あわれ中高年管理職は、清水ちなみ率いるOL達に、「駄目なおじさん」と揶揄されるに至ったのである。（“おじさん改造講座”文春文庫）

思えば旧世代の思い込みが次々と打ち碎かれる昨今である。子供に「テレビゲームばかりやっていると馬鹿になるぞ」と言っていたものだが、そのテレビゲーム世代から将棋の羽生名人が出て、伝統的修業を積んだ旧世代のベテラン棋士がなで切りにされた。学生が漫画本ばかり読むのは困っていたのが、今では漫画本はマルチメディアの前駆との位置づけである。

1950年代後半に工学部学生であった私が仕込まれた教育は、「装置はブラックボックスとして使ってはならぬ、原理や仕組みを良く知った上で使え」というものであった。事実、当時の装置は原理どおりの形をしていた。テレビでも真空管の取り替えぐらいはできたし、自動車でもキャブレタぐらいはいじることができた。今は手出しのしようがない。「装置は、ブラックボックスとして、役立つように使うもの」と、止めを刺したのは電子計算機である。複雑さの程度という量が昂じて、使い方の質を決定的に変えてしまったのであろう。こちらまで変って行かねばならぬが、若い時に受けた教育の影響というものは、牢固として抜きがたいものである。

戦後、旧仮名遣いが新仮名遣いに改められた時、小学生であった私は苦手な“ゑ”を使わずに

済むことが嬉しかったが、文筆家にとっては一大事であった。おじさんは“をちさん”であり、我が師の恩は“あふげばたふとし”であったのが、発音どおりに書けば良いとなってしまった。正しい仮名遣いを習得することは旧国語教育の中でも主要な部分を占めていたのであり、教養のシンボルでもあった。それが一気に無意味になってしまっただけではかなわない。発音どおりに記すのは無教養な人がやることで、愚劣な字づらだ。それはculture barrierとも言えるものであったのだろう。田辺聖子女史はやけっぱちで初めて新仮名遣いで文章を書いたときの心境を“処女を失った時のよう”であったと記している。（眉をひそめる人もいるかも知れないが、肝腎なところであるのでそのまま引用する。）こだわりが一気にとれてさばさばとし、愚劣なことが平気で書けるようになって、文章の世界がひろがったそうである。当節の言葉で言えばマインドコントロールが解けたと言うことになるだろうか。（“女の長風呂Ⅱ”文春文庫）

私も旧教育によるculture barrierの高い方である。テレビゲームまがいのことはやりたくない。退官までそう長くはないことだし、近づくに済まそうと思っていた。しかし、この7月に附属図書館長を拝命した折しも折り、国立大学図書館協議会は電子図書館化への体勢作りを文部省に要望したのである。電子図書館の柱となるのがインターネットだ。（本図書館通信No.112に合庭惇先生が電子図書館について書かれているのでお読みいただきたい。）マックやウィンドウズを使わずには済まないことになった。やむなくこの一夏パソコン小僧と化した。白髪頭がパソコンにしがみついているのはいささかそぐわぬ図ではあったろう。結果から言えば、田辺聖子女史の言にも似て、一種変身を果たしたような気分である。パソコンは賢い玩具であり、仕事の具らしからぬところが粹なのだろう。やたら頭の良い小学生のような気味悪さもあるが。

ご同輩の方々のために私のパソコン習得法をご披露すれば、まずマックとウィンドウズの解説書（ユーザーズガイドなど）を読み比べる。本だけ読んだのでは畳の上の水練よりも悪いから、身近の人の持っているパソコンをいじらせてもらい、また本に戻ることを繰り返す。両者の同じところ違うところを突き合わせていくと、おぼろげながら背後にある仕組みが浮かび上がって来る（ような気がする）ので、旧世代の原理を知りたい性癖を幾分かは満たしてくれる。情報処理センターのインターネット講習会も役に立った。百聞一見に如かずを実感させられた。老後のボケ防止に役立ちそうである。絵を見て指示するという方法は目と指が憶えてくれるので、記憶力の衰えてきた者には有難い。テレビのリモコンまでついダブルクリックしてしまうのは困るが。

さて、図書館が電子化しなければならない理由は、一言でいえば世の中に情報が溢れているからである。私が研究生生活に入った1960年に、Chemical Abstracts（化学関係の2次情報誌）は1年間にA4版で厚さ50cm、26千件を収録していた。1994年にはこれが240cm、653千件となり、本の厚さで5倍、件数で25倍に膨らんでいる。これは一分野の例に過ぎない。新たな出版物が絶え間なく現れ出てくるさまは、日頃生協書籍部で見てのとおりである。

このところ私は“開運・なんでも鑑定団”というテレビ番組を面白く見ている。家に眠っていた価値不明の書画・骨董などを、目利きの鑑定士達に値踏みしてもらうという趣向である。ちいさんの大事にしていたお宝を、息子や孫が持ち出して来るというケースが多いが、意外な高値や当て外れの安値が出て楽しませる。これを見ていて知るのは「量と価値は反比例する」という原則である。古い時代のものでも沢山作られたものは安値で、時代は新しくても限られた量しか作られなかったものには高値がつく。「良賈は深く蔵して無きが如くす」。溢れ出るように現れて来るものはあるいは無価値かも知れないと、旧世代はささやかな反抗をして溜飲を下げたい。

か ら ま つ

「落葉松の林を過ぎて」——振り返り見た大学図書館

前附属図書館長 小 澤 康 彦

本年6月末日をもって2年間の附属図書館長の任期を終えた。思い出す主な行事としては、まず「静岡大学附属図書館の現状と課題」の刊行（平成6年2月10日）である。表題の示す内容について自己分析を行なったもので、国立大学のなかでも最も早く実施した数大学のうちに数えられる。職員の図書館発展への熱情に支えられて、およそ半年の集中的な作業であった。職員の業務量について、同規模の14国立大学中最大との結果は、その改善の緊急性を強く心に刻み込まれるものであった。次いで、第41回国立大学図書館協議会総会（同年6月23日～24日）を当番館として開催したことである。約百の機関から三百人が参加する国立大学関係では最大の会合で、極めて密度の濃い研究集会であり多くのことを学んだ。永井学長を初め沖吉事務局長そして大学本部の御配慮と御助力、東海地区各大学の御協力によって、盛会裡に終了した。もとより谷口渉情報管理課長を中心におよそ1年間にわたり準備を進め、当日の仕事そして終了後の議事録の作成まで全力を尽くした図書館職員の労力が、会の成功と好評を得た原動力であったことは言うまでもない。館長としては秀れたスタッフと人々の御厚意に支えられた幸せを感謝するのみであった。名古屋大学とともに東海地区の理事館として「大学図書館員の育成・確保に関する調査研究」という基本的問題を担当している。また、地元的高等教育機関の連携・協力をはかるために「静岡県内大学等附属図書館長懇談会」を初めて開催した（平成7年1月27日）。規約も作成し、今後の活動が期待される。

電算化に伴い1988年度以降受入れの図書については登録されているが、それ以前のものについての目録データの遡及入力も緊急の課題である。幸い学長裁決の教育研究学内特別経費によって作業を進めているが、8年度までに需要の高い1980年代を完了させたいと考えている。その他、館内のスペースの一層の有効な利用のための改装や書庫の増築、土曜日の一日開館や休日開館、運営費の拠出の方法等さまざまな課題がある。（「図書館通信」108号の鈴木事務部長の文章、同112号の森松情報管理課長の説明を参照して戴きたい）

2年間のこうした諸行事や今後にも継続するいくつかの課題を振り返って、私の脳裡にふと浮かんで来るのは、あの北原白秋の「落葉松」の一節である。

からまつの林を過ぎて、
からまつをしみじみと見き。
からまつはさびしかりけり。
たびゆくはさびしかりかり。

からまつは落葉性高木で、密植をきらうという。孤高の印象である。これは、図書館をその主要な構成素としているはずの大学、大学を囲む現代日本社会、日本がその中で共存して行かなければならない世界、そうした各段階の連動した趨勢と現状を見ると、そうした印象を避け得ないの

である。つとに1964年（昭和39年）出版の著書の中で、数学者の岡潔氏は次の様に述べている。

ラテン文化をふりかえってみますと、その源はギリシアですが、そのころは昼の時代だとみな思っている。それに続く二千年のローマ時代は、これを夜の時代だとみな思っています。

この夜のあとに來たのが文芸復興期で、そのあいだが四、五百年。これは昼の時代だとみな思っています。・・・・・・

ところで、いまの世相は、ローマ時代とひじょうによく似ているように思いになりませんか。つまり、いまは闇の時代にさしかかっているのです。・・・・・・

しかし、ローマ時代はさいわいなことに自然科学がなかったのです。だから二千年も続きたのです。ところがいまはそうではありません。二千年はおろかはたして三百年も地球上に生物がもつかどうか、それすらあぶないと思います。

（「風蘭」（講談社現代新書） 37－38頁）

岡氏は、宇宙時代というのは原爆の延長、と考えている。科学技術の発達に比較して、人間の精神的成長がほとんど無く、相変わらずの欲望に基づく自己中心の場当たりの行動が人類と個人の歴史を形成している事実は、最近の中国やフランスの核実験に際しての発言を聞くまでもなく、人類の近い将来にも大きな不安を投げ掛けている。社会の主たる動向が目先の物質的利益追及にあり、大学における研究にも社会的要請の名の下にその動向への参加と加速が期待されている時代にあって、大学教育はどうあるべきかは今日從來になく重い課題となっている。

大学における人間的陶冶は、異なった学問分野の授業科目の並列的メニュー化によるのではなくして、学問研究に携わっている中で痛感するさまざまな苦悩、自分自身の生き方と社会に対する意義をめぐる思索の過程を教授者が語ることによって成されて行く様に思われる。ノーベルの苦悩は、現代では先例に学んで、事後にではなくして研究のさなかに語られる必要があると思われる。いわゆる専門教育の中でこそ、真の教養教育の核心が形成される様に考えられるのである。大学における授業履修総単位数の減少は、学生の自主的学習の増大が前提となるもので、欧米型教育への移行とも見られる。周知の様にそれを支えるものは附属図書館である。これまでの本学における教育を図書館を通して見る限り、教授者の授業における課題の出し方の頻度と計画性については、必ずしも適切、十分とは思われなかった。毎週課題を出す授業があると、それを中心に1週間が過ぎて行くと、学部を問わず学生は言う。課題が多く教授者間の調整が必要な状況こそ望ましいと思われる。

直接授業に関係はしないが、自分の興味に基づいて気儘に本を手にして行き、思いも掛けず熟読せざるを得ない本と出会うことは、大きな喜びと人生への助言を与えてくれる。そこから物質主義の画一的価値観を脱して、自分の人生の目的と理想の人間像を形成して着実に生きて行くことが可能となる。「からまつの林の道は／われのみか、ひととかよひぬ。／ほそぼそと通う道なり。／さびさびといそぐ道なり。」この一節の様に、数は少ないかも知れないが確かに時流を超越した同じ道を歩む他の人がある。「さびしさ」に耐える人生の共有者にとって、大学図書館が時間と空間のより確かな座標軸の基に、人々に個人と時代の進むべき道を考えさせる瞑想の場所としても在り続けることを強く願うものである。

（人文学部言語文化学科・英文学）

洋雑誌の到着状況がわかる

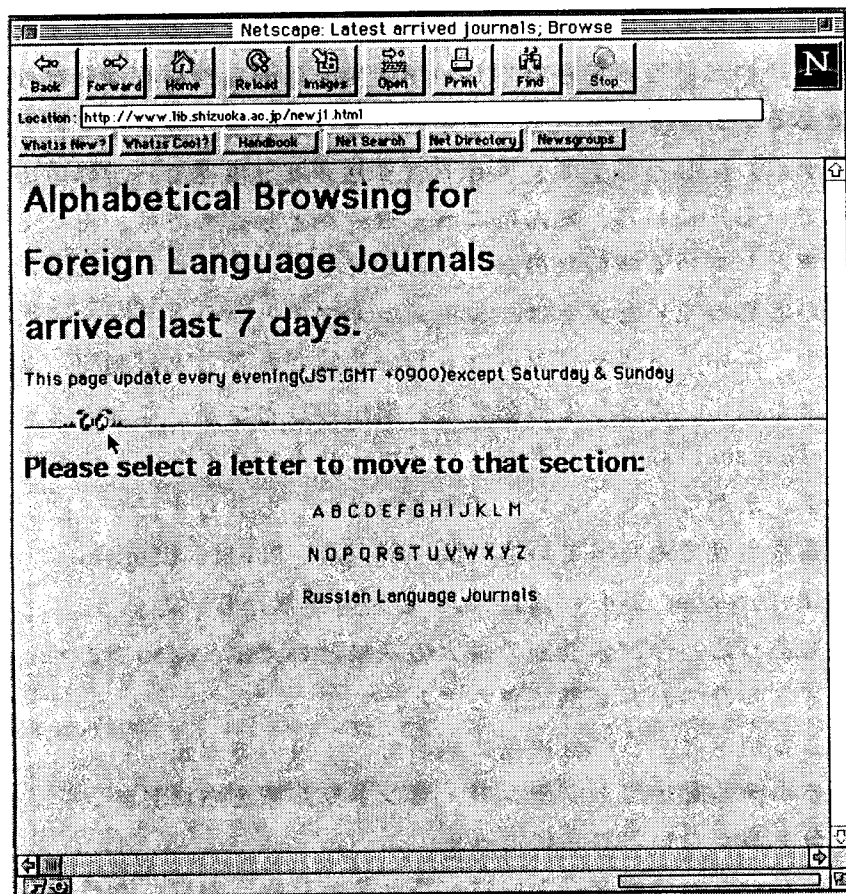
——WWWホームページに新機能追加——

雑誌の受入れ業務をしていて、圧倒的に多い問い合わせが、外国からの購入誌の到着状況。特に、自然科学系の雑誌に、火急な参照を必要とする論文が掲載されているらしい号など、それが到着するまで、毎日、もう到着しましたか、と電話が入り続けたりする。

情報処理センターのマシンで運用しているtelnet版の検索システムにも、雑誌の受入れ情報は入っているが、これは2週間に一度の更新。上記のような要請には、ほとんど無力ということになる。

リアル・タイムで受入れ情報を見ることが出来るL O O S / Uの方は、図書館に行かなければ、覗くことができない。それなら電話で問い合わせた方が、よほど楽なわけだ。

研究室から、リアル・タイムに近い時間差で見ることが出来る、という目的を達するために、本図書館のホームページ上に、上のような画面を付加した。最新一週間分の到着雑誌を、毎夕方更新し、それを見てもらうためのもの。今日を9月7日とするなら、1日から7日の間に到着した雑誌である。毎週、平均して300部ほど、多い週でも千を越えることはないので、キーワード等を使って検索するよりも、リストをブラウジングしてもらうことにした。Jで始まる雑誌を調べたい時は、上図でJをクリックすると到着リストのJの部分から見ることが出来る。スクロールバーで上下への移動も可能。



New York 公共図書館を見て

この9月の始め(2学期制の我が大学は、この時期、夏休みの真っ只中である)ニューヨークに行った。7日間ずっと市内に居続ける予定だったので、出かける前、滞在時のニューヨークでどのような行事等が行われるかWWWで調べてみた。

やはり夏休み中にハワイへ行った同僚は、そこでガイドブックには載っていない情報を得て、だいぶいい思いをしてきたらしいが、当方はそんな利益は受けなかった。情報の量が多すぎるからである。Lycos(カーネギー・メロン大学が運用している最大級のインターネットの検索システム)にしるCityNet(9月28日現在で、世界中の1,075の都市と549の地方が登録されている)にしる、たんにニューヨークとしたのでは、出てくるわ、出てくるわ、どれが自分の必要としている情報なのか、にわかには判別できない。確実にわかったことと言えば、是非訪れたいと思っていたメトは、シーズンオフ中ということ——もっとも、シティ・オペラの方でブッチーニの「トゥーランドット」の公演があることが判明、堪能しました。

メトと共に、どうしても訪れたい場所のひとつが「ニューヨーク公共図書館」だった。吉田秋生の「Bananafish」で有名だし、「ゴーストバスターズ」の冒頭でカードを飛ばされたところでもある。名所に行く、という感覚も無きにしもあらずだが、図書館の職員ということからすれば、最近重宝させてもらっている“The New York Public Library Desk Reference, 2nd ed.(1993)”の著者館だから、という動機もあった。今回の訪問の最大の成果といえ、何んでこのタイトルなのかが認識できたこと。

42番街(というのは映画の題名で、丁目の方が正しい)にあるホテルを出て、グランド・セントラル駅を右に見、10分も歩かないところにあった。

マンハッタンの摩天楼の中に、ひときわ目立つ重厚、クラシックな建物で、広々とした大理石の正面玄関。両脇にはライオン像。「忍耐」君と「堅固」さんの名前がある由。その間には What Price Freedom と書かれた大きな垂れ幕が下がっている。

実にタイミングが良く、今年はこの図書館ができて100年目ということで、「自由の対価」というタイトルで特別展が開催されていたのである。合衆国史の中のものが中心にならざるを得ないが、歴史的な価値のあるコレクションが多数展示されていた。コロンブスの手紙、ジェーファースンの自筆の「独立宣言」草案、マンデラ南ア大統領やキング師の直筆。忍耐・堅固・自由の対価と、かつて図書館史を学んでいた時に、耳にタコができるほど聴かされ、最近忙しさにかまけ

JOIN NOW!

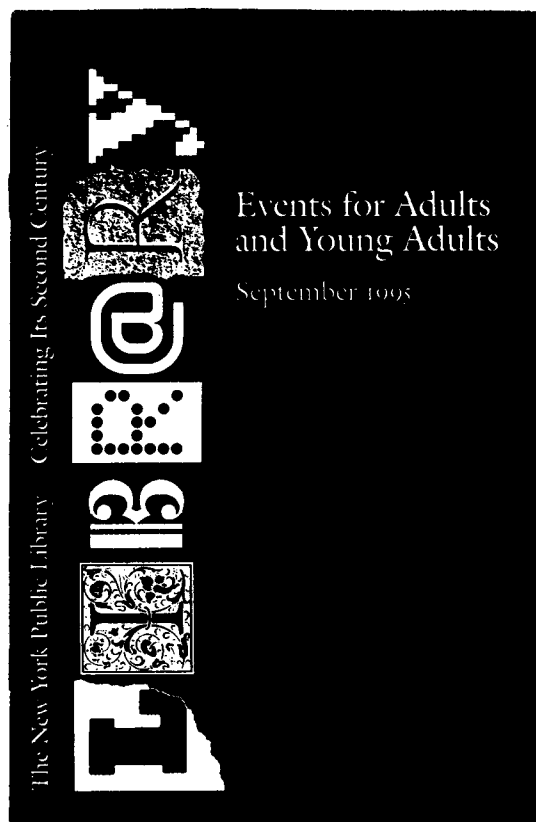


Photo by Anne Dux

Become a Friend of The
New York Public Library

て、すっかり忘れてしまっていたものを思い出させてくれた。

座り込んで話しをしている人、食事をとっている人、あるいは単に人待ちをしているらしい人と、大賑わいの正面階段を上がって中に入ると、ロビーのホールの奥、正面にインフォメーション・デスクと、警備員のデスク——制服を身に着けたいかにもそれらしい人が3名。アメリカでは、こんなところでも必須の人員配置のようだ。



※24ページからなるパンフレットには
85の図書館で開かれる催しものが、
ずらりとならんでいる。

参考図書以外の図書、雑誌、文献等は、アメリカでは珍しく（というのは、当方の体験ではなく、雑誌記事等の知識によればだが）閲覧票に記入し、係員に持ってきもらう方式である。閲覧票には、自分の座っているイスの番号の記入欄があり、主閲覧室以外の部屋を使っている人はそこまで資料を運んでもらえる。閲覧票の裏面の注意書きに「請求した資料が20分たっても届けられなければ、図書館員に申し出ること」とあるのには、我が静大では、そんなにかからないぞ、と思うと同時に、こちらは地下7階までの書庫があるとのこと、早い、と思ったことも事実。

インターネットがらみのことでは、「興味のある方は、ライブラリアンまでお申し出ください」というような表示をレファレンス・デスクで見かけた。ニューヨークから我が図書館のホームページにアクセスするのもおつなもの、と考え申し出ようと思ったが、ここの20台ほどある端末は全部ふさがっていて、しかもみんな熱心に画面に見入っている様子。空く気配がなかった。それで、インターネットはあきらめ、他のライン・モードで使用する端末をたたいていたら、Shizuoka Daigaku no kyouiku to kenkyuu の1993、1994という書名が表示された。驚いてしまって、残念なことに、その時アクセスしていたのが、ここの蔵書データベースなのか、それとも他の書

ホールの左右に白大理石の階段があり3階まで通じているが、壁面・天井には壁画が施されている。3階に至って Reading Room に入ると、天井には豪華なシャンデリア、調度品はどっしりした造りだし、ブロンズの読書灯さえ取り付けられている。建物の外観から得た印象は、中に入っても同じで、クラシカルで贅沢なことこのうえない。

とはいっても、単にそれだけだったら、こんな事を書く気にはならなかったと思う。そうした印象を受けたうえでかつ機能的である、と感じたからだ。まず、Reading Room の手が届く範囲に、参考図書の書棚が連々と並んでいること。さらに、端末の数も多い。大抵の調べものは、居ながらにして決着がつく、と見た。「リサーチ」に適した場所という印象である。

で、貰ってきたパンフレット類をひもとくと、実は、ここまで「ニューヨーク公共図書館」と書いてきたが、正確には、リサーチ・ライブラリーと書くべきもの。マンハッタン、ブロンクス、スタッテンに、ここを含めて85の図書館があり、それを総称してニューヨーク・パブリック・ライブラリーと言うらしい。ここはその図書館群の親玉という位置付けである。

誌データベースなのか確認するのを忘れてしまった。なにしろ、数多くのデータベースにアクセスできるのだから、仕方がない。

興味深かったのは、ライブラリー・ショップがあったこと。博物館や美術館ではおなじみだが、図書館で見かけるのは初めて。それも、半端ではなく、ライオン像のブックエンドがあり（ズシリと重い）、しおり、エンピツ、ボールペン（赤と黒のを2本買ってきました）、バッグ、コップ等の数々のオリジナル・グッズ、更に図書館関係の本や美術書と盛り沢山。この品揃えを支えているのは、当然、図書館としての魅力。ここには、所蔵する資料、それを閲覧のするためのシステム、それらの素晴らしさはもちろん、近代的大都会の喧騒の中にありながら、重厚な造りと落ち着いた雰囲気、それでいて見事に駆使されている最新鋭の機器類と、図書館としての魅力が溢れていた。

（レポート：渡邊、米津／文責：望月）

NACSIS-IR地域講習会 静大で開催

この9月26日、27日にかけて、情報処理センター分室を会場として、NACSIS-IR地域講習会が開かれました。講師は学術情報センターの数値・画像DB係長の甲斐重武、全文DB係小陳佐和子両氏。参加者は学内10名、学外9名（内2名は山梨、愛知からの参加者）

この講習会は、学術情報センターが全国各地に講師を派遣し開催されるもので、今年は札幌から鹿児島まで、11ヶ所で開催される予定ですが、講師のお話によれば、今回の受講者はきわめてまじめで、よく話を聞いてもらえたとのことでした。

前日の25日には、甲斐氏による「学術情報センター講演会」が行われました。

演題は「学術情報センターの電子図書館システムについて」でした。大変興味深いお話で、参加者は50名を越えました。

